日本における中国画題綜覧（六）

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (6)

張　小鋼

Zhang　Xiaogang

か行（二）

かんえい　桓榮

【作例】

「桓榮」（橘宗兵衛［有税］繪『繪本通寶志』巻五上、享保一四年［1729］刊本）

がんえんし　顔延之

顔延之（384～456）、字は延年といい、瑯琊（山東省）の人である。幼い頃、両親を亡くして貧しかった。彼はぼろぼろの家に住んでいたが、読書が好きで、手当たりの書物は何でも読んだ。文章はすぐれて、当時有名であった。文帝の命を受け、楽府の『北上篇』を作る。延之がすぐ完成したが、同じ文名を自負している謝霊運が随分時間をかけて完成した。延之はかつて鮑昭に作文の優劣を聞いたが、昭は「謝の文章は初めて開花した芙蓉のようで、初々しく可愛らしい。あなたの文章は錦の刺繍のようで、華々しい。」と答えた。潘江（247～300）と陸機（261～303）が文名が高く、他の追随を許さなかったが、江左（南京を中心とした江蘇省の南部）では顔延之と謝霊運（385～433）の著書が皆世に伝えられている。

【出典】

顔延之，字延年，瑯邪臨沂人也。曾祖含，右光祿大夫。祖約，零陵太守。父顯，護軍司馬。延之少孤貧，居負郭，室巷甚陋。好讀書，無所不覽。文章之美，冠絕當時。飲酒不護細行，年三十，猶未婚。［中略］雁門人周續之隱居廬山，儒學著稱，永初中，徵詣京師，開館以居之。高祖親幸，朝彥畢至，延之官列猶卑，引升上席。上使問續之三義，續之雅仗辭辯，延之每折以簡要。既連挫續之，上又使還自敷釋，言約理暢，莫不稱善。徙尚書儀曹郎，太子中舍人。［中略］復爲祕書監，光祿勲，太常。時沙門釋慧琳，以才學爲太祖所賞愛，每召見，常升獨榻，延之甚疾焉。因醉白上曰，昔同子參乘，袁絲正色。此三台之坐，豈可使刑餘居之。上變色。延之性既褊激，兼有酒過，肆意言直，曾無遏隱，故論者多不知云。居身清約，不營財利。布衣蔬食，獨酌郊野。當其爲適，旁若無人。［中略］世祖登阼，以爲金紫光祿大夫，領湘東王師。子竣既貴重，權傾一朝，凡所資供，延之一無所受。器服不改，宅宇如舊。常乘羸牛笨車，逢竣鹵簿，即屏往道側。又好騎馬，遨遊里巷，遇知舊輒據鞍索酒，得酒必頹然自得。常語竣曰，平生不喜見要人，今不幸見汝。竣起宅，謂曰，善爲之，無令後人笑汝拙也。表解師職，加給親信三十人。孝建三年，卒，時年七十三。追贈散騎常侍、特進，金紫光祿大夫如故。謚曰憲子。延

之與陳郡謝靈運俱以詞彩齊名，自潘岳、陸機之後，文士莫及也，江左稱顏、謝焉。所著並傳於世。（梁・沈約撰『宋書』巻七十三，列傳第三十三）

かんおんきこつ　桓温奇骨

桓温（312～373）、字は元子といい、譙国龍亢（安徽省）の人である。父親は宣城太守桓彝である。桓温が生まれてまだ一年経っていないが、大将軍温嶠（288～329）が桓温を見ると、「この子は『英傑の珍しい骨相』があり、泣かせてみたら」と言った。その泣き声を聞くと、果たして大物である。そのため、桓彝は温嶠の苗字を子の名前としたのである。桓温は父親のために復讐することで名を馳せたのである。後に明帝の南康長公主と結婚し附馬となった。（唐・房玄齢等撰『晉書』巻九八、列伝六八）

【出典】

晉書，桓溫字元子，譙國龍亢人。生未朞，溫嶠見之曰，此兒有奇骨。可試使啼。及聞其聲曰，眞英物也。父彝以嶠所以賞，故名之曰溫。嶠笑曰，果爾後將易吾姓也。溫豪爽有風槩，姿貌甚偉。面有七星。少與劉惔善。惔嘗曰，溫眼如紫石稜，鬚作蝟毛磔。孫仲謀晉宣王之流亞也。尚南康長公主，拜駙馬都尉，終大司馬南郡公。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「桓温奇骨」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻二、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

がんかい　顏回

顏回、字は子淵といい、魯（山東省）の人である。彼は孔子の弟子で、孔子より三十歳年下である。孔子は「賢明だな、回のこと。一箪の食事、一瓢の飲み物、貧しい横町に住み、人は皆憂いだが、回だけはその楽天の態度を変えない。回は愚かのようだ。自分のことだけ考えれば、十分裕福な生活ができる。回も愚かでない。主君に起用される時には行くが、捨てられる時には隠れる。これはあなたと私二人だけではないか。」と顏回を称賛した。回は二十九歳の頃、髪の毛が白くなり、早死にした。

【出典】

顏回者，魯人也，字子淵。少孔子三十歲。［中略］孔子曰，賢哉回也。一簞食，一瓢飲，在陋巷，人不堪其憂，回也不改其樂。回也如愚，退而省其私，亦足以發，回也不愚。用之則行，捨之則藏，唯我與爾有是夫。回年二十九，髮盡白，蚤死。（漢・司馬遷撰『史記』巻六十七，仲尼弟子列傳第七）

【作例】

「復聖顏子」［顏回］（明・呂維祺編『聖賢像讃』巻一、崇禎五年［1632］序刊本）

「顏回陋巷楽道」（『孔門儒教列傳』巻一、明刊本）

「顏回」（『任渭長畫傳四種』高士傳、中国古畫譜集成第四巻、山東美術出版社、2000年）

「顏回」（中澤道二翁閲『畫本實語教』巻一、享和一年［1801］序刊本）

かんぎょく　寒玉

寒玉は竹の別称である。唐代の詩人雍陶の七言詩「韋處士郊居」の詩に見える。

【出典】

滿庭詩境飄紅葉。繞砌琴聲滴暗泉。門外晚晴秋色老，萬條寒玉一溪煙。（雍陶「韋處士郊居」，清・彭定求等撰『全唐詩』巻五百十八）

かんけつば　汗血馬

汗血馬は大宛国（ウズベクスタンのフェルガナ）の名馬で、その汗が赤色のため、「汗血馬」と呼ばれたのである。漢武帝の頃、張騫が西域のシルクロードを開通し、汗血馬がはじめて知られるようになった。漢武帝は汗血馬を得るために、李広利を派遣し、大宛国まで遠征していた。

【出典】

初，天子發書易，云，神馬當從西北來。得烏孫馬好，名曰，天馬。及得大宛汗血馬，益壯。更名烏孫馬曰，西極。名大宛馬曰，天馬云。（漢・司馬遷撰『史記』巻一百二十三，大宛列傳第六十三）

四年春，貳師將軍廣利斬大宛王首，獲汗血馬來，作西極天馬之歌。應劭曰，大宛舊有天馬種，踏石汗血。汗從前肩髆出，如血。號一日千里。（漢・班固撰『前漢書』巻六，武帝紀第六）

【作例】

「天馬」（明・胡文煥撰『山海経圖』巻下、萬暦二一［1593］刊本）

「汗血馬」（清・程大約撰『程氏墨苑』巻八、萬暦二二～三七年［1594-1609］刊本）

「無題有詩」［汗血馬］（『詩畫舫』扇面、光緒三〇年［1904］刊本、上海點石齋書局石印本）

「汗血」（南仙笑楚満人撰、北尾重政畫圖『繪本高麗嶽』中、享和二年［1802］序、享和二年［1802］刊本）

かんこう・もうか　桓公・孟嘉

→「斉桓公」

【作例】

「桓公・孟嘉」［龍山落帽］（文鳳駿聲『文鳳麄畫』、享和三年［1803］刊本）

かんのこうそ　漢高祖

漢の高祖（前206～前195在位）、姓は劉といい、字は季という。沛豊邑中陽里（江蘇省沛）の人である。父親は太公といい、母親は劉媼という。かつて、劉媼は大沢の池のあたりに住んでおり、神の夢を見た。ある時、雷や稲妻が激しかった。太公が見に行ったら、蛟龍が妻の体の上にいた。間もなく妻が妊娠し、高祖を産んだ。高祖という人は、高い鼻柱で、美しい髭をして、左股に七十二の黒子がある。仁愛があり、善行が好きである。性格は大らかで、農作業が嫌いであった。壮年になって官吏の試験を受け、泗水亭の亭長になった。酒と女が好きである。よく王媼、武負のところに酒をもらう。酔うと寝てしまう。時々、武負、王媼は彼の上に龍が見える。不思議に思った。高祖はいつも酒を買って、その場で飲むので、かなり借金をした。王、武両家はその龍を見てから、年末に高祖の借金をチャラにした。

【出典】

高祖，沛豐邑中陽里人，姓劉氏，字季。父曰太公，母曰劉媼。其先劉媼嘗息大澤之陂，夢與神遇。是時雷電晦冥，太公往視，則見蛟龍於其上。已而有身，遂產高祖。高祖爲人，隆準而龍顏，美鬚髯，左股有七十二黑子。仁而愛人，喜施，意豁如也。常有大度，不事家人生產作業。及壯，試爲吏，爲泗水亭長，廷中吏，無所不狎侮。好酒及色。常從王媼、武負貰酒，醉臥，武負、王媼見其上常有龍，怪之。高祖每酤留飲，酒讎數倍。及見怪，歲竟，此兩家常折券棄責。［中略］正月，諸侯及將相，相與共請尊漢王爲皇帝。漢王曰，吾聞帝賢者有也。空言虛語，非所守也。吾不敢當帝位。羣臣皆曰，大王起微細，誅暴逆，平定四海，有功者，輒裂地而封爲王侯。大王不尊號，皆疑不信，臣等以死守之。漢王三讓，不得已，曰，諸君必以爲便，

便國家。甲午，乃卽皇帝位汜水之陽。［中略］四月甲辰，高祖崩長樂宮。（漢・司馬遷撰『史記』巻八，高祖本紀第八）

【作例】

「漢高祖」（明・天然撰『歴代古人像讃』、弘治一一年［1498］刊本）

「漢高祖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「漢高祖」（清・上官周撰『晚笑堂畫傳』、乾隆八年［1743］刊本）

「無題」［沛公過咸陽、酈食其為里監］（『點石齋叢畫』、中国古畫譜集成第九巻、山東美術出版社、2000年）

「漢高祖」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

「漢高祖像」（信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』巻六・補遺、明和八年［1771］刊本）

「漢高祖」（葛飾爲斎『萬物圖解爲斎畫式』初帙、元治一年［1864］序刊本）

かんこうどくちょう　寒江獨釣

「寒江獨釣」はまた「獨釣寒江」ともいい、唐の詩人柳宗元の五言詩「江雪」を図解する絵である。

【出典】

千山鳥飛絶。萬逕人蹤滅。孤舟蓑笠翁。獨釣寒江雪。（柳宗元「江雪」，清・彭定求等撰『全唐詩』巻三百五十二，中華書局）

【作例】

「獨釣寒江」（明・武夷蝶庵主［鄧志謨］編『梅雪争奇』巻下、天啓年間［1621～1627］刊本）

「寒江獨釣」（王念慈『王念慈先生山水畫稿』、1923年序石印本）

「無題詩あり」［寒江獨釣］（渡邉瑛編『邊氏畫譜』、文化三年［1806］刊本）

「寒江獨釣」（渡邉英編『玄對畫譜』巻三、文化三年［1806］序・題刊本）

かんのこうぶ　漢光武

光武帝（25～57在位）の名前は劉秀といい、字は文叔といい、南陽（河南省）の蔡陽の人である。彼は漢高祖劉邦の九世の末裔だと伝えられている。背が高くて美男子である。地皇三年（22）に南陽に飢饉が起きた。光武帝は新野（河南省新野）に避難し、宛（河南省南陽）に穀物を売りに行った。そこで宛の李通などの進言により、武装蜂起した。時に二八歳であった。建武元年（25）六月末に即位する。中元二年（57）に光武帝が崩御した。時に六二歳であった。

【出典】

世祖光武皇帝諱秀，字文叔，南陽蔡陽人，高祖九世之孫也。出自景帝生長沙定王發。發生春陵節侯買，買生鬱林太守外，外生鉅鹿都尉回，回生南頓令欽，欽生光武。光武年九歲而孤，養於叔父良。身長七尺三寸，美須眉，大口，隆準，日角。性勤於稼穡，而兄伯升好俠養士，常非笑光武事田業，比之高祖兄仲。王莽天鳳中，乃之長安，受尚書，略通大義。［中略］地皇三年，南陽荒饑，諸家賓客多為小盜。光武避吏新野，因賣穀於宛。宛人李通等以圖讖說光武云，劉氏復起，李氏為輔。光武初不敢當，然獨念兄伯生素結輕客，必舉大事，且王莽敗亡已兆，天下方亂，遂與定謀，於是乃市弩。十月，與李通從弟軼等起於宛，時年二十八。［中略］六月己未，卽皇帝位。［中略］於是建元為建武，大赦天下，改鄗為高邑。［中略］（中元二年）二月戊戌，帝崩於南宮前殿，年六十二。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻一～巻二，一～八七頁）

【作例】
「漢光武像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物二巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「漢光武」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

かんこ　諫鼓

→「諫鼓誹謗」

【作例】
「諫鼓」［諫鼓鶏］（渓斎英泉畫『畫本錦之嚢』不分巻、文政一一年［1828］序刊本）
「諫鼓」（『職巧雛型錦袋畫叢』）
「諫鼓」［諫鼓鶏］（雪蕉斎『畫本拾葉』巻中、寛延四年［1751］序、寶暦一年［1751］刊本）
「諫鼓之圖」［諫鼓鶏］（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻四、享保五年［1720］刊本）

かんこくさんがあり　漢國山河在

唐の荊叔（けいしゅく）の「題慈恩塔」（慈恩塔（じおんとう）に題す）という五言絶句を図解する絵である。

【出典】
漢國山河在，秦陵草樹深。暮雲千里色，無處不傷心。（荊叔「題慈恩塔」，明・李攀龍編『唐詩選』巻六・五言絶句）

【作例】
「漢國山河在」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］原刻、寛政六年［1794］再刻本）
「漢國山河在」（石峯先生書画『畫本唐詩選』一編、天明八年［1788］原刻、文化二年［1805］再刻本）

かんこのとり　諫鼓鶏

【出典】
→「諫鼓誹謗」

【作例】
→「諫鼓」

かんのごずい　漢五瑞

漢五瑞とは黄龍、白鹿、嘉禾、甘露と木連理である。

【出典】
漢五瑞。黄龍、白鹿、嘉禾、甘露、木連理。（清・宮夢仁撰『讀書紀數略』巻十七）

【作例】
「漢五瑞」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化七年［1810］序刊本）

かんこひぼう　諫鼓誹謗

「諫鼓誹謗」は「諫鼓謗木」ともいう。伝えることによると、堯は太鼓を設け、諫めたい者がその太鼓を叩き、自分の意見を述べることができるといい、舜は誹謗の木柱を立て、人がそこに意見を書くことができるという。

【出典】
古者天子聽朝，公卿正諫，博士誦詩，瞽箴師誦，庶人傳語，史書其過，宰徹其膳，猶以爲足也。故堯置敢諫之鼓。欲諫者擊其鼓舜立誹謗之木。書其善否於表木也（『淮南子』巻九，主術訓）

【作例】
↓「諫鼓」

かんざん　寒山

【作例】
↓「寒山拾得」
「寒山子」（明・泰興王安宇朱壽鏞、鉅野府文宇朱頤厓『泰興王府畫法大成』巻三、萬暦三七年［1609］刊本）
「寒山」（狩野探幽繪『詩仙堂志』詩仙圖録、萬治二年［1659］序刊本）
「寒山」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］刊本）

かんざんじ　寒山寺

寒山寺は蘇州の郊外にあり、唐の詩人張継の詩「楓橋夜泊」で有名である。

【出典】
月落烏啼霜滿天，江楓漁父一爲火對愁眠。姑蘇城外寒山寺，夜半鐘聲到客船。（張繼「楓橋夜泊」，清・彭定求等編『全唐詩』巻二百四十二）

【作例】
↓「楓橋夜泊圖」

かんざんじっとく　寒山拾得

寒山と拾得は天台山の和尚である。寒山は氏名不詳である。かつて始豊県（浙江省天台）の寒岩の中に住んでいた。時には拾得について国清寺に行き僧侶たちの残飯を食べる。時には空に向って罵る。寺の僧侶が杖で彼を追い出した。拾得の氏名も不詳である。和尚豊干が山の中を通った際、子供の泣き声が聞こえた。豊干は近づいて見ると、幼い子供がいた。すると、豊干は子供に名付けて「拾得」（拾って得た）といい、連れて帰った。ある日、拾得がほうきで掃除しているところ、寺の住職が拾得に尋ねた。「あなたの名前は拾得というが、それは豊干があなたを拾ったからだ。あなたは一体何の名字だか。」と。拾得はほうきを置いて手を合わせて立った。住職がもう一度尋ねると、拾得がほうきを拾い続けて掃除した。

閭丘公が丹丘に赴任に来た。国清寺を訪ね、豊干に会い、安否を伺った。豊干は「文殊と普賢に会いなさい。」と言った。「二人はどこにいるか」と尋ねると、「国清寺に炊飯の釜を持っている寒山と拾得だ。」と答えた。そこで、閭丘が訪ねに行くと、二人は炉端を囲んで談笑しているところであった。閭丘が近付いて挨拶すると、逆に二人に叱られた。しばらくすると、二人は笑いながら言った。「豊干が饒舌で、余計なことを言った。」と。言い終わると、二人は手をつないで門を出て、また寒岩に行き、岩の隙間に入った。岩の隙間は突然閉めた。閭丘は大変悲しくて、部下に二人の遺品を調べさせた。木の葉っぱに書いている数十首の詩や詞だけであった。

【出典】
天台山寒山子，因衆僧多茄次，將茄串向一僧背上打一下。僧回首，山呈起茄串曰，是甚麼。僧曰，這風顛漢。山向傍僧曰，你道這僧費卻我多少鹽醋。因趙州遊天台，路次相逢。山見牛跡，問州曰，上座還識牛麼。州曰，不識。山指牛跡曰，此是五百羅漢遊山。州曰，既是羅漢，爲甚麼卻作牛去。山曰，蒼天，蒼天。州呵呵大笑。山曰，作甚麼。州曰，蒼天，蒼天。山曰，這廝兒宛有大人之作。（宋・普濟撰『五燈會元』巻二，西天東土應化聖賢附）
天台山拾得子，一日掃地，寺主問，汝名拾得，因豊干拾得汝歸。

汝畢竟姓箇甚麼。拾得放下掃帚，叉手而立。主再問，拾得拈掃帚掃地而去。寒山搥胸曰，蒼天，蒼天。拾得曰，作甚麼。山曰，不見道東家人死，西家人助哀。二人作舞，笑哭而出國清寺。半月，念戒衆集，拾得拍手曰，聚頭作想那事如何。維那叱之。得曰，大德且住，無嗔卽是戒。心淨卽出家。我性與你合，一切法無差。（宋・普濟撰『五燈會元』巻二，西天東土應化聖賢附）

寒山拾得。初，豐干經行山中，道側見一兒，可數歲。豐干攜至國清寺，付典座曰，或人來認，可還之。名曰，拾得。後沙門靈熠令去內廚滌器，常日齋畢，澄溢食滓，寒山卽來負之而去。寒山者，始豐縣西有寒、暗二谷，以其居寒岩中，遂名寒山子。以樺皮爲冠，時來國清寺。從拾得取僧殘食菜滓食之。閭丘旣入禮拜，二人自此相攜出松門，入寒岩。閭丘又隨之，二士入岩，其石忽然縫合。（傳燈錄。宋・謝維新撰『古今合璧事類備要』前集巻四十九）

【作例】

「寒山拾得」［瀧本式部卿筆］（法橋春卜畫『和漢名筆畫本手鑑』、享保五年［1720］序・跋刊本）

「寒山拾得」（橘有税［橘氏宗兵衛］繪『繪本通寶志』巻五下、享保一四年［1729］刊本）

「無題」［寒山拾得］（法眼春卜雪静編『畫巧潛覧』巻四、元文五年［1740］刊本）

「寒山拾得」（橘守国畫圖『運筆麁畫』巻中、寛延一年［1748］序、弘化一年［1844］刊本）

「寒山拾得」（雪蕉斎『畫本拾葉』巻中、寛延四年［1751］序、寶暦一年［1751］刊本）

「寒山拾得」（英一蜂『畫本圖編』巻中、寛延四年［1751］序・跋、寶暦一年［1752］刊本）

「寒山拾得」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』巻中、明和三年［1766］刊本）

「寒山拾得」（玉翠斎藤原義包圖『畫圖撰要』巻下、明和三年［1766］刊本）

「寒山拾得」（英一蝶『群蝶畫英』下、明和六年［1769］題言、安永七年［1778］刊本）

「寒山拾得」（鈴鄰叅筆『戯画抜粋一蝶畫譜』巻中、明和七年［1770］序刊本）

「寒山拾得」［僧如雪筆］（信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』初巻、明和八年［1771］刊本）

「寒山拾得」［牧心斎安信筆］（信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』巻三、明和八年［1771］刊本）

「寒山拾得」（『雅興筆意畫圖絶妙』中、安永三年［1774］序、明和九年跋刊本）

「寒山拾得」（武者周榮筆『古畫要覧』、安永九年［1780］刻成、文化九年［1812］求版）

「寒山拾得」（蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年［1794］刊本）

「寒山拾得」（渡邊瑛編『邊氏畫譜』、文化三年［1806］刊本）

「寒山拾得」（文鳳山人［文鳳駿聲］『文鳳畫譜』三編、文化八年［1811］刊本）

「寒山拾得」（鍬形蕙斎『人物略畫式』、文化一〇年［1813］刊本）

「無題」［寒山拾得］（尾形光琳『光琳百圖』上、文化一二年［1815］跋刊本）

「寒山拾得」［扇面］（尾形光琳『光琳百圖』下、文化一二年［1815］跋刊本）

「寒山拾得」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』四編、明治一二年［1879］刊本）

「寒山拾得」（河鍋洞郁『暁斎酔畫』初編、明治一五年［1882］刊本）

「寒山拾得」（滝澤清畫『潛龍畫譜』人物之部、明治一五年［1882］

刊本）
「寒山拾得」（『初心畫鑑』、昭和三年［1928］刊本）
「無題」［寒山拾得］（『圓翁畫譜』）

かんざんじっとく　寒山十得

↓「寒山拾得」

【作例】
「寒山十得」［宗秀筆］（『本朝畫林』巻上、寶暦二年［1752］序刊本）

がんし　顔子

↓「顔回」

【作例】
「顔子」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］刊本）

がんしけんぱく　顔駟蹇剝

漢武帝は郎署に至り、ある老人を見かけた。その老人の髪の毛や鬚が真っ白で、着衣も乱れている。武帝は「貴方が何時郎になったでしょうか。なぜこんなに年を取ったでしょうか」と聞いた。老人は「臣下は顔という姓で、駟という名でございます。文帝の頃すでに郎となりました」と答えた。武帝は「なぜこんなに年を取って不遇でしょうか」と。「文帝は文才を好まれたが、臣下はまだ若かったでございます。景帝は年寄りを好まれたが、臣下は武事が得意でございます。陛下は若い人を好まれたが、臣下はすでに年を取ったのでございます。故に三世に渡っても出世できませんでした」と。武帝はその言葉に感慨深く、老人を会稽都尉に任命した。（無名氏『漢武故事』、漢魏六朝筆記小説大観、上海古籍出版社）

【出典】
漢武故事曰，上至郎署舍，見一老郎鬚眉皓白。問何時爲之。對曰，臣姓顔名駟，文帝時爲郎。文帝好文而臣好武，景帝好老而臣尚少，陛下好少而臣已老。是以三葉不遇也。上感其言，擢爲會稽都尉。一本作景帝好美臣貌醜。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】
「顔駟蹇剝」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

がんしゅくし　顔叔子

顔叔子は一人住まいである。隣に寡婦（やもめ）が一人で住んでいる。ある日の夜、その婦人の家屋が暴風雨に襲われ、倒壊した。婦人が慌てて顔叔子の家に避難してきた。顔叔子は婦人を家に入れたが、蠟燭を婦人に持たせたままであった。蝋燭が燃え尽きると、顔叔子は屋根の葺いた萱草を抜いて朝まで燃やし続けた。

【出典】
昔者，顔叔子獨處于室，鄰之釐婦又獨處于室。夜暴風雨至而室壞，婦人趨而至。顔叔子納之，而使執燭放乎旦。而蒸盡縮屋而繼之，自以爲辟嫌之不審矣。若其審者，宜若魯人。然魯人有男子獨處于室，鄰之釐婦又獨處于室。夜暴風雨至而室壞，婦人趨而託之，男子閉戶而不納婦人自牖與之言曰，子何爲不納我乎。男子曰，吾聞之也，男子不六十不間居。今子幼吾亦幼，不可以納子。婦人曰，子何不若柳下惠，然嫗不逮門之女，國人不稱其亂。男子曰，柳下惠固可，吾固不可。吾將以吾不可，學柳下惠之可。（『毛詩注疏』巻十九）
顔叔子獨處一室，夜大雨，比舍屋崩，一女子趍而投之。叔子使執燭於手，燭盡焚燎以繼，至明不二志。其篤行如此。（『日記故事大全』巻四、和刻本）

【作例】
↓「嫠婦」

がんしゅくへいしょく　顔叔秉燭

↓「顔叔子」

【出典】
毛公詩傳曰，昔者顔叔子獨處於室。鄰人嫠婦又獨處於室。夜暴風雨至而室壞。婦人趨而至。叔子納之而使執燭放乎旦。而蒸盡縮屋而繼之。自以爲辟嫌之不審矣。若其審者，宜若魯人然。魯有男子。獨處於室。鄰人嫠婦又獨處於室。夜暴風雨至而室壞。婦人趨而託之。男子閉戶而不納。曰，吾聞之。男女不六十不閒居。今子幼，吾亦幼。不可以納子。婦人曰，子何不若柳下惠然。嫗不逮門之女，國人不稱亂。男子曰，柳下惠固可。吾固不可。吾將以吾不可學柳下惠之可。孔子曰，欲學柳下惠者，未有似於是也。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】
「顔叔秉燭」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編巻三、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんしょうし　韓湘子

韓湘子、字は清夫といい、韓愈の姪である。自由奔放で、束縛されるのが嫌いである。純陽先生に出会い、ついて放浪する。桃の木に登って墜落して亡くなった。屍解（道教では屍が蒸発したことをいう）となり、韓愈に会いにきた。韓湘子は「湘が学んだものは伯父さまと異なる。」と言った。韓愈はムッとした。韓湘子に詩を作らせ、その志を観察しようとした。そこで韓湘子が詩を作った。

青山雲水窟。此地是吾家。
子夜飡瓊液。寅晨咀絳霞。
琴彈碧玉調。爐煉白硃砂。
寶鼎存金虎。芝田養白鴉。
一瓢藏造化。三尺斬妖邪。
解造逡巡酒。能開頃刻花。
有人能學我。同共看仙葩。

韓愈が読んでから、「あなたはまさか自然の造化を動かせるか。」と聞いた。すると、韓湘子は早速樽を開け、中の果実はすでに酒になっていた。さらに土を集めて間もない間に二輪の花が咲いた。牡丹のような形だが、より大きく、より鮮やかである。花と花との間に金字の対句が現れ、「雲横秦嶺家何在、雪擁藍関馬不前。」とある。韓愈がそれを読んでわからず、意味を尋ねると、湘子は「後日にわかる。」と答えた。間もなく、韓愈が仏舎利のことを皇帝に諫めたため、潮州（広東省）に左遷された。赴任に行く途中、大雪に遭い、突然一人がやってきた。よく見ると、韓湘子であった。湘子は「まだ前の対句を覚えているか。」と聞いた。韓愈は居場所を尋ねると、藍関だという。韓愈がしばらくため息をした。湘子はさらに、「私はあなたのためにその詩句を補足してやる。」と言った。それはすなわち韓愈詩集の中の「一封朝奏九重天」云々である。そこで湘子と一緒に藍関の官舎に泊まった。韓愈はその時湘子が言ったことが間違いなかったことを信じた。湘子が韓愈と別れる際、一つの瓢箪を出した。中に丹薬が入っている。湘子は韓愈に「一粒を服用すると、瘴毒を防ぐことができる。」と言った。韓愈が悲しくなった。湘子は「あなたは間もなく朝廷に呼び戻される。それに前と同じく復権するだろう。心配無用。」と慰めた。韓愈は「また会えるか。」と聞くと、湘子は「将来のことはまだわからない。」と答えた。

【出典】
韓湘子，字清夫。韓文公之猶子也。落魄不羈。遇純陽先生。因從游。

登桃樹墮死而尸解，來見文公，文公勉之學。湘曰，湘之所學與公異。公不悅，令作詩以觀其志。詩曰，青山雲水窟，此地是吾家。子夜飡瓊液，寅晨咀絳霞。琴彈碧玉調，爐煉白硃砂。寶鼎存金虎，芝田養白鴉。一瓢藏造化，三尺斬妖邪。解造逡巡酒，能開頃刻花。有人能學我，同共看仙葩。公覽曰，子豈能奪造化耶。公［湘子］即爲開樽，果成佳醞。復聚土無何。開碧花二朶，似牡丹差大，顏色更麗。花間擁出金字一聯，云，雲橫秦嶺家何在，雪擁藍關馬不前。公讀之不解其意。湘曰，他日自驗。未幾，公以極諫佛骨事謫官潮州。途中遇雪，俄有一人冒雪而來，乃湘也。曰，公能憶花間之句乎。公詢其地。即藍關。嗟嘆久之。曰。吾爲汝足此詩。即韓集中一封朝奏九重天云云。遂與湘宿藍關傳舍。公方信湘之不誣也。湘辭去。出藥一瓢與公曰，服一粒可以禦瘴毒。公愴然。湘曰。公不久即西。不惟無恙。且當復用於朝。公曰，此後復有相見之期乎。湘曰，前期未可知也。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻六）

【作例】

「韓湘子」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻六、萬曆二八年［1600］刊本）

「韓湘子」（明・洪應明撰『仙佛奇踪』巻二、萬曆三〇年［1602］刊本）

「韓湘子」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十一巻、萬曆三七年［1609］刊本）

「湘子点化文公」「藍関湘子掃堂」（『孔門儒教列傳』巻四、明刊本）

「韓湘子」（清・任熊『列仙酒牌』、咸豊四年［1854］刊本）

「韓湘」（渡邉瑛編『邊氏畫譜』、文化三年［1806］刊本）

「韓湘子假形傳口口」（錢塘雉衡山人編次『新鐫批評韓湘子』、天啓三年［1623］刊本）

かんのしょうれつ　漢昭烈

→「劉備」

【作例】

「漢昭烈帝像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物二巻、萬曆三七年［1609］刊本）

「漢昭烈」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

かんしん　韓信

韓信は淮陰（江蘇省淮安）の人である。初めに布衣の頃、貧しくて徳行もなかった。故に官吏になれなかった。それに商売もできず、自立できない。いつも人の家に居候して飲食させてもらった。従って彼を嫌った人が多かった。よく南昌亭長の家に居候して食べさせてもらった。数カ月が経っても出ていく気配が見られないので、亭長の妻が困ってしまった。わざと朝早く朝食を炊いて、食事のときに、信が行ったが、彼の分は用意されなかった。信はその意図が分かり、腹が立って去って行った。

【出典】

淮陰侯韓信者，淮陰人也。始爲布衣時，貧無行，不得推擇爲吏。又不能治生商賈，常從人寄食飲，人多厭之者。常數從其下鄕南昌亭長寄食，數月，亭長妻患之，乃晨炊蓐食。食時信往，不爲具食。信亦知其意，怒，竟絕去。（漢・司馬遷撰『史記』巻九十二，淮陰侯列傳第三十二）

【作例】

「韓信像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物四巻、萬曆三七年［1609］刊本）

「淮陰侯」（清・上官周繪『晩笑堂画傳』、乾隆八年［1743］刊本）
「淮陰侯」［王孫一飯］（明・陳洪綬『博古葉子』、順治九年［1652］刊本）
「韓信」［王孫一飯］（前北斎畫改狂老人筆『畫本魁』巻一、天保七年［1836］刊本）
「韓信」［韓信股潜り］（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］刊本）
「韓信」［韓信股潜り］（縹弓臥筆、歌川国直畫『神事行燈』、文政一二年［1829］序刊本）
「韓信」［韓信魚釣り］（馬場信意撰『分類畫本良材』巻二、正徳五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）
「韓信」（馬場信意撰『分類畫本良材』巻七、正徳五年［1715］須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板）
「漢の韓信」（滝澤清畫『潛龍畫譜』人物之部、明治一五年［1882］刊本）
↓「韓信股潜り」、「王孫一飯」

かんしんしょうだん　韓信升壇

前漢の韓信は淮陰（江蘇省淮安）の人である。信は項梁や項羽に仕えたが、不遇であった。後に劉邦に仕えたが、治粟都尉（食糧の調達官）に任命され、やはり不遇であった。信が失望した余り、脱走した。蕭何が信を説得して戻らせた。さらに劉邦を説得し、壇を築いて、壇上で信を大将軍として任命したという。（司馬遷『史記』巻九二、淮陰侯列伝第三十二）

【出典】

前漢 韓信 淮陰人。家貧無行，不得推擇爲吏。後屬項羽爲郎中，數以策干羽。羽弗用。亡歸漢。漢王以爲治粟都尉。上未之奇。數與蕭何語。何奇之。信度上不用卽亡。何追之。居一二日來謁。上罵曰，諸將亡以十數。公無所追。追信詐也。何曰，諸將易得。至如信國士無雙。王必欲爭天下，非信無可與計事者。於是擇日齋戒，設壇場具禮，拜爲大將。諸軍皆驚。後封楚王，都下邳。謀反。赦爲淮陰侯。卒爲呂后所斬。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「韓信升壇」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻六、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんじんうまにのるず　官人乗馬之圖

【作例】

「官人乗馬之圖」［二図、王若水筆］（法眼周山編『和漢名筆畫英』巻一、寛延三年［1750］刊本）

がんしんけい　顔眞卿

顔眞卿（709～785）、字は清臣といい、瑯琊臨沂（山東省臨沂）の人である。五代の祖は有名な大学者顔之推であり、北齊の黄門侍郎であった。眞卿は少年の頃から勉強家で、文章や書道が共に得意であった。開元（713～741）年間の進士であった。親孝行でよく知られる。監察御史などを歴任したが、楊貴妃の兄楊国忠の恨みを買い、平原太守に左遷された。安禄山が反乱を起こした際、他の城が次々と陥落したが、眞卿の平原城だけが守備が固く守られた。玄宗帝はそれを聞き、臣下に嬉しそうに、「朕は顔眞卿の顔を知らないが、ちゃんとやってくれた。」と称賛した。

【出典】

顔眞卿，字清臣，瑯邪臨沂人也。五代祖之推，北齊黄門侍郎。眞卿少勤學業，有詞藻，尤工書。開元中，舉進士，登甲科。事親以孝

聞，四命爲監察御史，充河西隴右軍試覆屯交兵使，五原有冤獄，久不決。眞卿至，立辯之。天方旱，獄決，乃雨。郡人呼之爲御史雨。又充河東朔方試覆屯交兵使，有鄭延祚者，母卒二十九年，殯僧舍垣地。眞卿劾奏之，兄弟三十年不齒，天下聳動。遷殿中侍御使，東都畿採訪判官，轉侍御史武部員外郎。楊國忠怒其不附己，出爲平原太守。安祿山逆節頗著，眞卿以霖雨爲託，修城浚池，陰料丁壯儲廩實，乃陽會文士泛舟外池飲酒賦詩。或讒於祿山，祿山亦密偵之，以爲書生不足虞也。無幾，祿山果反，河朔盡陷，獨平原城守具備，乃使司兵參軍李平馳奏之。玄宗初聞祿山之變，歎曰，河北二十四郡，豈無一忠臣乎。得平來大喜，顧左右曰，朕不識顏眞卿形狀何如，所爲得如此。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻一百二十八，列傳第七十八）

【作例】

「顏眞卿」（明・天然撰『歷代古人像讃』、弘治一一年［1475］刊本）

「顏眞卿」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』巻六、萬曆二八年［1600］刊本）

「顏眞卿像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物六巻、萬曆三七年［1609］刊本）

かんしんまたくぐり　韓信股潜り

淮陰の肉屋の少年の中に韓信を辱める人がいた。「あなたは体がでかいし、刀を携帯するのも好きのようだが、内心では怖がり屋さんではないか。」と、さらに「本当の男ならば、私を刺してごらん。でなければ、私の股の下を潜れ」とからかった。そこで信はしばらく考えて、相手をじっと見つめて、男の股の下を匍匐前進して潜った。市場の人々は皆信を嘲笑った。彼等は信が卑怯者だと思った。

【出典】

淮陰屠中少年有侮信者，曰，若雖長大，好帶刀劒，中情怯耳。衆辱之曰，信能死，刺我。不能死，出我袴下。於是信孰視之，俛出袴下，蒲伏。一市人皆笑信，以爲怯。（漢・司馬遷撰『史記』巻九十二，淮陰侯列傳第三十二）

【作例】

「無題」［韓信股潜り、『史記』の一節あり］（葉九如編『三希堂畫譜』人物畫譜大観、中国古畫譜集成第十八巻、山東美術出版社、2000年）

「無題」［韓信股潜り］（石川豊信『繪本明不乃草』、明和七年［1770］刊本）

「韓信股潜り」（山東京傳『繪兄弟』、寛政六年［1794］自序刊本）

→「韓信」

かんせいじみょう　瓘靖二妙

衛瓘（220～291）、字は伯玉といい、河東郡安邑（山西省夏県）の人である。魏の頃、尚書郎、侍中などを歴任した。晉武帝（265～290在位）の咸寧（275～280）頃、尚書令に任命され、加えて侍中という官職を与えられた。衛瓘と敦煌の尚書郎索靖はともに草書に長けている。故に「一台二妙」といわれる。台とは「尚書台」（尚書省）のことで政権中枢の官僚組織を指している。妙とは文章の妙である。（唐・房玄齢等撰『晉書』巻三六）

【出典】

晉書，衛瓘字伯玉，河東安邑人。武帝時，拜尚書令，加侍中。性嚴整以法御下。視尚書如參佐，郎若掾屬。瓘學問深博，明習文藝。與尚書郎索靖俱善草書。時號一臺二妙。（唐・李瀚撰『蒙求集注』巻上）

【作例】

「瓘靖二妙」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻三、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんせいちゅう　韓世忠

韓世忠（1089～1151）、字は良臣といい、延安（陝西省延安）の人である。風格があり、目が稲妻のようにまたたく。若い頃、勇猛果敢で、訓練されていない馬に乗ることができる。家が貧しく家業がない。酒を好み、暴れん坊であった。占い師が「三公まで出世できる。」と予言したが、自分を侮辱していると思い、占い師を殴った。十八歳の頃、敢勇兵の募集に応募した。赤籍に属していた。武芸超人で、勇敢で三軍を冠した。

【出典】

韓世忠，字良臣，延安人。風骨偉岸，目瞬如電。早年鷙勇絶人，能騎生馬駒。家貧無産業，嗜酒尚氣不可繩。檢日者言，當作三公。世忠怒其侮己，毆之。年十八，以敢勇應募鄉州，隸赤籍，挽強馳射，勇冠三軍。（元・脫脫等撰『宋史』巻三百六十四，列傳第一百二十三）

【作例】

「韓世忠」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻一、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1753］刊本）

かんたいし　韓退之

→「韓愈」

【作例】

「韓退之」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］刊本）

「韓退之」（橘守国『繪本直指寶』巻三、延享二年［1745］刊本）

かんたいし・もうとうや　韓退之・孟東野

韓退之は韓愈の条項をご参照ください。

孟郊（751～814）、字は東野といい、洛陽（河南省洛陽）の人である。孟郊は韓愈と親交がある。韓愈は孟郊のことを「東野」と呼び、孟郊との間に詩の唱和がある。

【出典】

孟郊者，少隱於嵩山，稱處士。李翺分司洛中，與之遊。薦於留守鄭餘慶，辟爲賓佐。性孤僻寡合，韓愈一見以爲忘形之契，常稱其字曰東野，與之唱和於文酒之間。鄭餘慶鎮興元，又奏爲從事，辟書下而卒。餘慶給錢數萬葬送，贍給其妻子者累年。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻一百六十，列傳第一百十）

郊，字東野，洛陽人。初隱嵩少，稱處士。性介，不諧和。韓愈一見爲忘形交，與唱和於詩酒間。貞元十二年李程榜進士，時年五十矣。調溧陽尉。縣有投金瀨、平陵城。林薄蓊鬱，下有積水。郊間往坐水傍，命酒揮琴，裴回賦詩終日，而曹務多廢。縣令白府，以假尉代之，分其半俸。辭官家居。李翺分司洛中，日與談讌。薦於興元節度使鄭餘慶，遂奏爲參謀，試大理平事，卒。餘慶給錢數萬營葬，仍贍其妻子者累年。（元・辛文房撰『唐才子傳』巻五）

【作例】

「孟東野」（明刊本『歴代古人像賛』、弘治一一年［1498］刊本）

「韓退之・孟東野」（某岡之繪『繪圖の林』巻上、元禄二年［1689］刊本）

「韓退之・孟東野」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻一、文政一年［1818］再刊本）

かんたいし、りはんががくにこころざしあつきをかんじ、しのぜいをつくりあたゑるづ　韓退之、李蟠が學に志篤きを感じ、師の説を作り與る圖

→「師弟教受禮ある圖」

【出典】

李氏子蟠，年十七，好古文。六藝經傳皆通習之。不拘於時。請學於余。余嘉其能行古道，作師說以貽之。（韓愈「師說」、『古文眞寶後集』巻五五八）

【作例】

「韓退之、李蟠が學に志篤きを感じ、師の説を作り與る圖」（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻四、嘉永三年［1850］刊本）

かんたん　邯鄲

開元十九年（731）、道士呂翁が邯鄲を通ってある旅館に着いた。荷物を降ろして休んでいるところ、ある若者が入ってきた。彼の名前は盧生といい、道士と談笑して実に愉快であった。しばらくすると、盧生は自分の服を見ながら、ため息をした。彼は「男として不遇のため、こうなった。」と言った。道士は彼を慰めたが、彼は「男は功名を立て、将軍や宰相になり、美食を食べ、音楽を聴くべきである。自分は若い頃それを志したが、いまや壮年が過ぎてまだ田圃の仕事に苦労していて、不遇としか言いようがない。」と言い終わると、あくびをして眠たくなった。ちょうど店の主人が黄粱の飯を蒸しはじめ、食事の準備をしているところである。そこで道士が盧生に一つの枕を渡した。盧生は夢の中で清河の貴族の崔氏の娘を娶り、出世を果たし、栄華富貴の生活を享受した。その一方、世の中の浮き沈みを経験した。目が覚めた後、黄粱の飯がまだできていない。盧生は悟り、道士に謝って去って行った。

【出典】

開元七年，道士有呂翁者，得神仙術，行邯鄲道中，息邸舍。攝帽弛帶，隱囊而坐。俄見旅中少年，乃盧生也。衣短褐，乘青駒，將適于田，亦止於邸中。與翁共席而坐，言笑殊暢。久之，盧生顧其衣裝敝褻，乃長歎息曰，大丈夫生世不諧，困如是也。翁曰，觀子形體，無苦無恙，談諧方適，而歎其困者，何也。生曰，吾此苟生耳，何適之謂。翁曰，此不謂適，而何爲適。答曰，士之生世，當建功樹名，出將入相，列鼎而食，選聲而聽。使族益昌而家益肥，然後可以言適乎。吾嘗志于學，富於遊藝，自惟當年青紫可拾。今已適壯，猶勤畎畝。非困而何。言訖，而目昏思寐。時主人方蒸黍。翁乃探囊中枕以授之，曰，子枕吾枕。當令子榮適如志。其枕青瓷，而竅其兩端。生俛首就之，見其竅漸大，明朗。乃舉身而入，遂至其家。數月，娶清河崔氏女。女容甚麗，生資愈厚。生大悅，由是衣裝服馭，日益鮮盛。明年，舉進士登第，釋褐祕校。應制，轉渭南尉，俄遷監察御史，轉起居舍人，知制誥。三載，出典同州，遷陝牧。生性好土功，自陝西鑿河八十里，以濟不通。邦人利之，刻石紀德。移節汴州，領河南道採訪使。徵爲京兆尹。是歲，神武皇帝方事戎狄，恢宏土宇。會吐蕃悉抹邏及燭龍莽布支攻陷爪沙，而節度使王君㚟新被殺，河湟震動。帝思將帥之才，遂除生御史中丞，河西道節度。大破戎虜，斬首七千級，開地九百里。築三大城以遮要害。邊人立石於居延山以頌之。歸朝冊勳，恩禮極盛。轉吏部侍郎，遷戶部尚書兼御史大夫。時望清重，羣情翕習。大爲時宰所忌，以飛語中之，貶爲端州刺史。三年，徵爲常侍。未幾，同中書門下平章事。與蕭中令嵩、裴侍中光庭同執大政十餘年，嘉謨密命。一日三接。獻替啓沃，號爲賢相。同列害之，復誣與邊將交結，所圖不軌。下制獄，府吏引從至其門而急收之。生惶駭不測，謂妻子曰，吾家山東。有良田五頃，足以禦寒餒，何苦求祿。而今及此，思衣短褐，乘青駒，行邯鄲道中，不可得也。引刃自刎。其妻救之，獲免。其罹者皆死。獨生爲中官保之，減罪死，投驩州。數年，帝知冤，復追爲中書令，封燕國公。恩旨殊異，生五子，曰儉、曰傳、曰位、曰倜、曰倚，皆有才器。儉進士登第，爲考功員外。傳

爲侍御史。位爲太常丞。倜爲萬年尉。倚最賢，年二十八，爲左襄。其姻媾皆天下望族。有孫十餘人。兩竄荒徼，再登台鉉。出入中外，徊翔臺閣。五十餘年，崇盛赫奕。性頗奢蕩，甚好佚樂。後庭聲色，皆第一綺麗。前後賜良田、甲第、佳人、名馬，不可勝數。後年漸衰邁，屢乞骸骨，不許。病，中人候問，相踵於道，名醫上藥，無不至焉。將歿，上疏曰，臣本山東諸生。以田圃爲娛。偶逢聖運，得列官敘。過蒙殊奬，特秩鴻私。出擁節旌，入昇臺輔。周旋中外，綿歷歲時。有忝天恩，無裨聖化。負乘貽寇，履薄增憂，日懼一日，不知老至。今年逾八十，位極三事。鐘漏並歇，筋骸俱耄。彌留沉頓，待時益盡。顧無成效，上答休明。空負深恩，永辭聖代。無任感戀之至。謹奉表陳謝。詔曰，卿以俊德，作朕元輔。出擁藩翰，入贊雍熙。昇平二紀，實卿所賴。比嬰疾疹，日謂痊平。豈斯沈痼，良用憫惻。今令驃騎大將軍高力士就第候省。其勉加鍼石，為予自愛。猶冀無妄，期於有瘳。是夕，薨。盧生欠伸而寤，見其身方偃於邸舍。呂翁坐其傍，主人蒸黍未熟，觸類如故。生蹶然而興，曰，豈其夢寐也。翁謂生曰，人生之適，亦如是矣。生憮然良久，謝曰，夫寵辱之道，窮達之運，得喪之理，死生之情，盡知之矣。此先生所以窒吾欲也。敢不受教。稽首再拜而去。（沈既濟「枕中記」，宋・李昉等撰『文苑英華』巻八三三）

【作例】

「入夢」（明・湯義仍撰、臧晋叔訂『邯鄲記』巻上、臧氏彫虫館、萬暦四六年［1618］序刊本）

「邯鄲」［二図］（橘守国『謡曲畫誌』巻十・邯鄲、享保二〇年［1735］刊本）

かんたんのおとこ　邯鄲男

→「邯鄲」

かんたんすいむ　邯鄲炊夢

→「邯鄲」

かんたんひしん　桓譚非讖

後漢の桓譚（前24～56）、字は君山といい、沛国の相県（安徽省淮北）の人である。父親が成帝（前33～7在位）の頃太楽令だったため、譚も音律を好み、鼓に長けていた。光武帝（25～57在位）が即位した後、議郎給事中に任命された。帝が讖言（政治の予言）によって物事を決断するので、譚にたずねると、譚は讖言を非難したため、帝の怒りを買い処刑されるところであった。譚が懸命に謝って、ようやく許しをもらい、六安郡（安徽省六安）に左遷された。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻二十八上）

【出典】

後漢 桓譚字君山，沛國相人。好音律。世祖即位，拜議郎給事中。後詔會議靈臺所處。時帝方信讖，多以決定嫌疑。謂譚曰，吾欲讖決之何如。譚曰，臣不讀讖。帝問其故。譚復極言讖之非經。帝大怒曰，譚非聖無法。將下斬之。口頭流血，乃得解。出為六安郡丞卒。（唐・李瀚撰『蒙求集注』巻上）

【作例】

「桓譚非讖」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』巻二、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんちこつりつしゅき　旱地忽律朱貴

朱貴は『水滸伝』の豪傑の一人である。「旱地忽律」は朱貴の綽名である。朱貴は梁山泊の水辺に居酒屋を営みながら、外の情報収集や連絡の役を務める。

【出典】

那漢慌忙答禮，說道，小人是王頭領手下耳目。小人姓朱名貴，原是沂州沂水縣人氏，江湖上但叫小弟做旱地忽律。山寨裏教小弟在此間開酒店爲名，專一探聽往來客商經過。但有財帛者，便去山寨裡報知。但是孤單客人到此，無財帛的，放他過去。有財帛的來到這里，輕則蒙汗藥麻翻，重則登時結果，將精肉片爲羓子，肥肉煎油點燈。（百二十回本『水滸傳』第十一回）

【作例】

「朱貴」（清・陸謙繪『天罡地煞圖』不分巻、天保六年［1835］和刻本）

「旱地忽律朱貴」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年［1829］序、萬極堂梓）

「旱地忽律朱貴」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年［1848］不朽堂刻本）

「旱地忽律朱貴」（泉龍亭是正編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』三編、大橋堂梓、小田原屋又七板）

かんちゅう　管仲

管仲は、夷吾といい、潁上の人である。若い頃、よく鮑叔と一緒に放浪した。鮑叔は管仲が賢人であることを知っている。管仲は貧しくてよく鮑叔をいじめたが、鮑叔はいつも管仲に好意的で、いやなことを一言も言わなかった。その後、鮑叔が公子小白に仕え、一方管仲が公子糾に仕えた。後に小白が即位し、すなわち齊の桓公である。公子糾が亡くなり、管仲が囚われた。鮑叔が管仲を桓公に推薦し、管仲が任用された。桓公が九つの諸侯を連合して盟主になれたのは、管仲の策略であった。管仲は言った。「初めの頃、私は貧しくて鮑叔と一緒に商売した。得た利益はいつも自分の方に多めにした。なのに、鮑叔は私が貪ると思わない。なぜならば、私が貧しいのが分かっているからだ。かつて私は鮑叔のために図ったことがある。しかし皆失敗した。なのに、鮑叔は私が愚かだと思わない。なぜならば、時には有利と不利があることを知っているからだ。かつて私は三回闘って三回逃げて主君に追い出された。なのに、鮑叔は私が卑怯だと思わない。なぜならば、私に老母がいるのを知っているからだ。公子糾が失敗し亡くなり、私が囚われた。なのに、鮑叔は私が恥知らずだと思わない。なぜならば、私が細かいことを恥と思わないし、功名を恥として天下に名を知られたくないからだ。私を産んでくれたのは両親だが、私を分かってくれたのは鮑叔である。」と。

【出典】

管仲夷吾者，潁上人也。少時常與鮑叔牙游，鮑叔知其賢。管仲貧困，常欺鮑叔，鮑叔終善遇之，不以爲言。已而鮑叔事齊公子小白，管仲事公子糾。及小白立，爲桓公，公子糾死，管仲囚焉。鮑叔遂進管仲。管仲既用，任政於齊，齊桓公以霸，九合諸侯，一匡天下，管仲之謀也。管仲曰，吾始困時，嘗與鮑叔賈，分財利多自與，鮑叔不以我爲貪，知我貧也。吾嘗爲鮑叔謀事而更窮困，鮑叔不以我爲愚，知時有利不利也。吾嘗三仕三見逐於君，鮑叔不以我爲不肖，知我不遭時也。吾嘗三戰三走，鮑叔不以我爲怯，知我有老母也。公子糾敗，召忽死之，吾幽囚受辱，鮑叔不以我爲無恥，知我不羞小節而恥功名不顯于天下也。生我者父母，知我者鮑子也。（漢・司馬遷撰『史記』巻六十二，管晏列傳第二）

【作例】

「管敬仲」［管仲］（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』巻一、道光一〇年［1830］刊本）

「管仲」（馬場信意『分類畫本良材』巻二、正徳五年［1715］刊本）

「管仲之圖像」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻五、享保五

年［1720］刊本）
「管仲」（橘宗兵衛［有税］繪『繪本通寶志』巻五上、享保一四年［1729］刊本）

かんちゅう　関中

「関中」とは古代の地名であるが、広い意味では函谷関より西の秦の領地、四つの関口の間の地域を指す。狭い範囲では東は函谷関、南は武関、西は散関、北は蕭関の中に位置し、主として昔の秦（陝西省）の領地を指す。

【出典】
古地名。所指範圍不一。或指函谷關以西戰國末秦故地（有時包括秦嶺以南的漢中、巴蜀，有時兼有陝北、隴西）。或指居於衆關之中的地域。今指陝西渭河流域一帶。（下略）（『漢語大詞典』第十二巻上冊，漢語大詞典出版社）
夫秦四塞之礦也，雖偏鎮于西隅，而國之形勢實爲天下雄固，帝霸之業也。若夫盤五而秀于南者，則中南太乙焉。巃嵸乎陰于西極，而東望潼關者，則華嶽焉。東注咸陽，則灃水之所導也。其境有蘭池、阿房之宮。咸陽之南，周之鎬京也。茫茫四鄰，南北相望，秦宮所營，灃其鬱焉。豈惟涇水之望陵哉。西北臨乎幽國，而奕奕者，其梁山也。絪緼而蒼蒼，內有離宮別館。昆明西陂，輦道紆曲而相屬者，秦之上林也。鬱然起于鄠之東南者，有紫閣峯焉。其周之靈臺廢也久矣。橫畫乎藍田者，有秦嶺焉。灞水之所出，嶢閣之所鎮也。截于西域，而嫖姚之所開者，其玉門之關乎。環于漢陽而微茫者，其鳥鼠乎。限於北漠之陲，匈奴依垣而窺者，此秦之長城紫塞也。紆蔽乎朔方，而胡笳戰馬之所集者，其賀蘭之山乎。聲下龍門，景如太華，而浩蕩者，黃河也。而瀑布之漭漾者，則太白焉。荊山峙于河，則大禹鑄鼎之墟也。若夫太液曲江之池，樂遊細柳之原，驪山之溫泉，新豐之扮社，隴山之九坂，長安之章臺，又有博望，西郊芙蓉，未央長樂建章甘泉之宮，不可勝數。其近而羅列者，皆鍾秀于雍州，其遠而環帶者，皆隱耀于關中也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理八巻）

【作例】
「関中圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理八巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「関中」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻二、享保四年［1719］刊行）

がんつくしてしょかたくよせ　雁盡書難寄

唐の沈如筠（しんにょいん）の「閨怨二首」という五言絶句を図解する絵である。

【出典】
雁盡書難寄，愁多夢不成。願隨孤月影，流照伏波營。（沈如筠「閨怨」，清・彭定求等編『全唐詩』巻一百十四）

【作例】
「寫盡書難寄」（『百人一詩畫譜』、安永三年［1774］原刻、寛政六年［1794］再刻本）

かんとうしんぽ　竿頭進歩

「竿頭進歩」は南泉禅師の弟子長沙和尚の偈の中の言葉である。通常「百丈竿頭」といい、または「百尺竿頭」ともいう。

【出典】
湖南長沙景岑，號招賢大師。初住鹿苑，爲第一世。其後居無定所，但徇緣接物，隨請說法。故時衆謂之長沙和尚。［中略］僧云，和尚未見南泉已前作麼生。會云，不可更別有也。僧迴擧似師。師示一偈曰，百丈竿頭不動人，雖然得入未爲眞，百丈竿頭須進步，十方世界是全身。僧問，只如百丈竿頭如何進步。師云，朗州山，澧州水。僧云，請師道。師云，四海五湖皇化裏。（宋・釋道原撰『景德傳燈錄』

巻十）

【作例】

「竿頭進歩」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻五、貞享四年［1687］刊本、文政一年［1818］再刊本）

かんのさんけつ　漢三傑

漢の高祖は洛陽の南宮で宴会を開き、皆に尋ねた。「皆さんは私に隠さず言ってみよう。私はなぜ天下を得たか。項羽はなぜ天下を亡くしたか。」と。高起、王陵が答えた。「陛下は傲慢かつ人を侮辱する。項羽は仁かつ人を愛する。しかしながら、陛下は人を使って城や土地を攻略し、功労者にちゃんと分けて公平にやる。項羽は賢人や才能のある人を嫉妬する。功労者を殺害し、賢者を疑う。勝った場合、人の功績をちゃんと評価しない。土地を勝ち取った場合、人に分けようとしない。だから、天下を亡くした。」と。高祖は、「皆さんはその一を知っているが、その二を知らない。本部で作戦の案を練って千里以外で決勝を決めるのは張良の方が私より有能だ。国を管理して人民を安定させ、軍需を供給して、補給線を確保するのは蕭何の方が私より有能だ。百万の軍隊を率い、百戦百勝を確実にするのは韓信の方が私より有能だ。この三人は皆人傑である。私は彼らを使えるから、天下を勝ち取れたのだ。項羽は一人の范増さえ使えないので、私に負けたわけだ。」と言った。

【出典】

高祖置酒雒陽南宮。高祖曰，列侯諸將無敢隱朕，皆言其情。吾所以有天下者何。項氏之所以失天下者何。高起、王陵對曰，陛下慢而侮人，項羽仁而愛人。然陛下使人攻城略地，所降下者因以予之，與天下同利也。項羽妒賢嫉能，有功者害之，賢者疑之，戰勝而不予人功，得地而不予人利，此所以失天下也。高祖曰，公知其一，未知其二。夫運籌策帷帳之中，決勝於千里之外，吾不如子房。鎮國家，撫百姓，給餽饟，不絕糧道，吾不如蕭何。連百萬之軍，戰必勝，勝必取，吾不如韓信。此三者，皆人傑也。吾能用之，此吾所以取天下也。項羽有一范增而不能用，此其所以爲我擒也。（漢・司馬遷撰『史記』巻八，高祖本紀第八）

【作例】

「漢三傑」（『點石齋叢畫』、光緒一一年［1885］刊本、上海點石齋書局石印本）

「漢三傑」（大原民聲編、浅野思成筆『名数畫譜』天、文化六年［1809］序刊本）

かんのしそう　漢四相

蕭何、曹参、魏相、邴吉といった四人のことである。

【出典】

漢四相史臣曰，高祖開基，蕭曹爲冠。孝宣中興，丙魏有聲。蕭何，曹參，魏相，丙吉。（明・張九韶撰『羣書拾唾』巻五）

かんのこうぶんてい　漢孝文帝

→「漢文帝」

【作例】

「漢孝文帝」（馬場信意『分類畫本良材』巻一、正徳五年［1715］刊本）

→「漢文帝」

かんのごずいのず　漢五瑞圖

「漢五瑞」とは、黄龍、白鹿、嘉禾、甘露、木連理である。

【出典】
漢五瑞。漢時以此五物爲瑞。黄龍，白鹿，嘉禾，甘露，木連理。（明・張九韶撰『羣書拾唾』巻十）

かんじゅらく　還珠楽

隋侯が出かけた際、大蛇が怪我をしたのを見た。そこで隋侯は部下に大蛇の手当をさせた。後日、大蛇が真珠を銜え、お礼に来た。その真珠は直径が一寸以上あり、純白で夜中に室内を照明できるほどである。故に「隋侯珠」といい、また「霊蛇珠」や「明月珠」ともいう。

【出典】
隋縣滍水側有斷蛇丘，隋侯出行，見大蛇被傷中斷，疑其靈異，使人以藥封之，蛇乃能走，因號其處斷蛇丘。歲餘，蛇銜明珠以報之。珠徑盈寸，純白而夜有光明，如月之照，可以燭室，故謂之隋侯珠，亦曰靈蛇珠，又曰明月珠。（晉・干寶撰『搜神記』巻二十）
隋侯姓祝，字元暢往齊國，見一蛇在沙中，頭上有血，隋侯以杖挑放水中而去。後回至蛇所，乃見蛇啣一珠來，隋侯不敢取，夜夢腳踏一蛇，驚覺，乃得珠。光明如月之照，世號爲隋侯珠。（明・張瑞圖校『新鍥類解官様日記故事大全』巻六，救蛇得珠，和刻本）

【作例】
「還珠楽」（公長『公長畫譜』天、天保五年［1834］刊本）

かんのしょうてい　漢章帝

漢章帝（75～88在位）、名前は劉炟という。明帝の子である。永平三年（60）、皇太子になった。永平十八年（75）に即位した。人に寛容的で、儒学が好きである。帝になってから、減税、倹約、生産奨励などいろいろの措置を講じて、生産を発展させ、社会を安定させた。明帝（57～75在位）の頃と合わせて「明章の治」と称賛された。章和二年（88）に亡くなり、謚は孝憲皇帝という。

【出典】
肅宗孝章皇帝諱炟，顯宗第五子也。母賈貴人。永平三年，立爲皇太子。少寛容，好儒術，顯宗器重之。十八年八月壬子，即皇帝位，年十九。［中略］壬辰，帝崩於章德前殿，年三十三。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻三，肅宗孝章皇帝紀第三）

【作例】
「漢章帝像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物二巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「漢章帝」（馬場信意『分類畫本良材』巻一、正徳五年［1715］刊本）

かんそりゅうがん　漢祖龍顔

漢の高祖劉邦（前206～前195在位）は、字は季といい、沛豊邑の中陽里の人である。伝えることによると、劉邦の母親がかつて池の斜面で休憩していたところ、神様と出会う夢を見た。その時雷電が激しかったため、劉邦の父親は慌てて行ったら、竜と妻が交合する場面を見かけた。しばらくすると、劉邦の母親が劉邦を産んだ。劉邦は竜顔をしていたという。

【出典】
前漢高祖諱邦字季，沛豐邑中陽里人。姓劉氏。母媼嘗息大澤之陂，夢與神遇。是時雷電晦冥。父太公往視，則見交龍於上。已而有娠。遂產高祖。隆準而龍顔，美鬚髯，左股有七十二黑子。寛仁愛人，意豁如也。常有大度，不事家人生產作業。（唐・李瀚撰『蒙求集注』巻上）

【作例】
「漢祖龍顔」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻三、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんぞう　萱草

萱草はまた「宜男」とも、「忘憂」とも、「緑蕙」ともいう。五、六種類ある。その一は「香萱」であり、「黄萱」とも「金萱」ともいい、上等である。その二は「蜜萱」であり、時々花が咲く。その三は「秋萱」であり、秋に花が咲き、冬に葉っぱが落ちない。その四は「緑萱」である。

【出典】

萱花，一名宜男，一名忘憂，一名緑蕙。有五六種。一香萱，又名黄萱，又名金萱，甚佳。一蜜萱，不時有花。一秋萱，秋著花，冬不葉凋。一緑萱，有千葉及單葉者，摘花曬乾，或鮮，俱可入湯。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二巻）

【作例】

「萱花」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「萱草」（橘守国『繪本直指寶』巻六下、延享二年［1745］刊本）

かんたいし　韓退之

→「韓愈」

【作例】

「韓退之像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物六巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「韓退之」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）

かんたいしりはんがくにこころざしあつきをかんじしのぜいをつくりあたゆるず　韓退之李蟠が學に志篤きを感じ師の説を作り與る圖

唐の韓愈の「師説」を図解する挿絵で、全部で三枚ある。これは「其三」である。

【出典】

李氏子蟠，年十七，好古文，六藝經傳皆通習之，不拘於時，請學於余。余嘉其能行古道，作師説以貽之。（韓愈「師説」，『古文眞寶後集』巻二）

【作例】

「韓退之、李蟠が學に志篤きを感じ、師の説を作り與る圖」［其三］（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻四、嘉永三年［1850］刊本）

→「師弟教受禮ある圖」［其一］、「孔子七十を教導し給ふ圖」［其二］

かんてい　桓帝

→「関羽」

【作例】

「桓帝」［慶翁筆］（『本朝畫林』巻上、寶暦二年［1752］序刊本）

かんねい　管寧

管寧（158～241）、字は幼安といい、北海朱虚（山東省臨朐）の人である。若い頃から勉強が好きで、華歆、邴原と親交があり、ともに異国に遊学した。遼東で曹操は管寧に官職を与えたが、管寧はそれを断った。後に魏の文帝（220～226在位）が管寧を太中大夫に任用したかったが、管寧ははやり固辞した。魏の明帝（226～239在位）は

管寧を光禄勲に任用したかったが、結局管寧は就かなかった。管寧は故郷で亡くなった。

【出典】

管寧，字幼安，北海 朱虛人也。年十六喪父，中表愍其孤貧，咸共贈賵，悉辭不受，稱財以送終。長八尺，美鬚眉。與平原 華歆、同縣邴原相友，俱遊學於異國，並敬善陳仲弓。天下大亂，聞公孫度令行於海外，遂與原及平原 王烈等至于遼東。度虛館以候之。既往見度，乃廬於山谷。時避難者多居郡南，而寧居北，示無還志，後漸來從之。太祖爲司空，辟寧，度子康絕命不宣。［中略］黄初四年，詔公卿舉獨行君子，司徒華歆薦寧。文帝卽位徵寧，遂將家屬浮海還郡，公孫恭送之南郊，加贈服物。自寧之東也，度、康、恭前後所資遺，皆受而藏儲。既已西渡，盡封還之。詔以寧爲太中大夫，固辭不受。明帝卽位，太尉華歆遜位讓寧，［中略］正始二年，太僕陶丘一、永寧衛尉孟觀、侍中孫邕、中書侍郎王基薦寧，［中略］於是特具安車蒲輪，束帛加璧聘焉。會寧卒，時年八十四。（晉・陳壽撰『三國志』巻十一，魏書・袁張涼國田王邴管傳第十一）

【作例】

「管寧」（『任渭長畫傳四種』高士傳、中国古畫譜集成第四巻、山東美術出版社、2000年）

かんねいかつせき　管寧割席

→管寧

【作例】

「割席分坐」（元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』巻四、嘉靖二一年［1542］序刊本）

「管寧割席」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻四、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんねいしゃし　甘寧奢侈

甘寧は、字は興覇といい、巴郡の臨江の人である。彼は若い頃、任侠であった。後に孫権に仕え、折衝将軍を拝命した。『呉書』によると、甘寧は大変贅沢である。出掛ける際、陸路は必ず車騎で、水路は必ず速い船である。侍従は皆刺繍の服を着る。帳は必ず真珠や玉で飾る。常に錦織で舟を止める紐とする。舟を出すときに、紐を切り捨てるという。（晉・陳寿撰『三国志』巻五五・呉書）

【出典】

吳志，甘寧字興覇，巴郡 臨江人。少有氣力，好游俠，招合輕薄少年，爲之渠帥。仕孫權，以功拜折衝將軍。吳書曰，寧輕俠殺人，藏舍亡命，聞於郡中。其出入，步則陳車騎，水則連輕舟，侍從被文繡，幃帳以珠玉爲飾，常以繪錦維舟，去或割棄，以示奢也。江表傳曰，曹公出濡鬚，臨水飲馬。權率衆應之，使寧爲前部督，勑使夜入魏軍。寧選健兒百餘人，徑詣曹公營下，踰壘入營，斬數十級。北軍驚駭。權曰，孟德有張遼，孤有興覇。足相敵也。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「甘寧奢侈」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻八、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんのちょうりょう　漢の張良

→「張良」

【作例】

「漢の張良」（高井蘭山翁撰、葛飾前北斎爲一翁畫圖『繪本孝経』、天保五年［1834］序、嘉永二年［1849］刊本、元治一年［1864］再刻）

かんのん　観音

観音はまた観世音菩薩、観自在、観世自在ともいう。梵文では「Avalokitesvara」という。中国では四大菩薩の一人として知られる。三十二種の変身が可能である。早期の観音像は男の身であったが、南北朝の頃女体の像が現れ、唐以後定着するようになった。

【出典】

觀音大士絶不聞有婦人稱。嘗考法苑珠林宣驗冥祥筭記，觀音顯迹，下朝至衆，其相或菩薩，或沙門，或道流，絶無一作婦人者。婦人之訛皆起於宋人。而元僧遂以爲妙莊王女，可笑也。睿甫云，妙莊王之說誠誕。然謂女相起於宋元則未然。如什元楚廬山東林記有花冠百寶風容動搖之語。僧皎然觀音讚有慈爲雨兮惠爲風，灑芳襟兮襲輕佩之句。此豈外婦人服相。今吳道子畫像尚刻石滁州，垂瓔帶釧全非沙門菩薩之狀，則知婦人之說非起於宋元也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物巻十）

【作例】

「観音」［唐呉道子］（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「観音」［唐人畫譜に二図、宋人畫譜に二十三図］（『芥子園畫傳』第四集・人物、嘉慶二三年［1818］初刊本、光緒二一年［1895］石印本）

「観音三十二相」（明・程幼博『観世音菩薩三十二相大慈悲心忏』）

「観音」（林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年［1712］序、享保六年［1721］刊本）

「観音」［雪舟等楊筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』三巻、寛延二年［1749］序刊本）

「観音」［紫野大心筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』六巻、寛延二年［1749］序刊本）

「白描観音」（渡邉瑛編『邊氏畫譜』、文化三年［1806］刊本）

「観音」（瓜生政和著、河鍋洞郁畫『暁斎畫談内篇』巻上、明治二〇年［1887］刊本）

かんばく　観瀑

【作例】

「観瀑」（老蓮先生著『畫圖酔芙蓉』上巻、享和三年［1803］序、文化六年［1809］叙刊本）

がんひつ　顔筆

【作例】

「顔筆」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］刊本）

かんふじん　韓夫人

唐の僖宗（873～888在位）の頃、儒者于祐が夕方宮廷の城壁の外を散歩した際、水路の中に木の葉っぱが流れていた。中の一枚の葉っぱに字が書いてあるようで、手に取って見ると、詩句が書いてある。すると祐は自分の書笥に保存した。かわりに「君恩不禁東流水。流出宮情是此溝。」という詩句を別の葉っぱに書いて水に流した。祐は何回も科挙の試験を受けたが、いずれも落第した。仕方なく中貴人韓泳に頼ることにした。しばらくすると、泳は祐に、「帝が宮女を三十人放出して、人に嫁がせる。中には韓夫人という人がいて、私と同じ姓である。今宮廷を出て、私の家に泊まることとなった。あなたはまだ結婚していない。もう結婚の年である。夫人はいいところの娘で、三十になったばかりで、容姿がきわめて美しい。私が言うので、あなたと結婚したらどうだ。」と言った。祐は席を離れて礼をした。すると、

トントン拍子で結婚することとなった。ある日、韓夫人は祐の本箱の中から自分が書いた詩句の紅葉を見て驚いた。「これは私が書いた詩句だが、なぜあなたのところにあるのか。」と、祐に尋ねた。祐はその経緯を説明すると、韓夫人は「私も水から拾った紅葉を持っている。だれが書いたのかはわからないが。」といい、箱を開けてその紅葉をとり出した。よく見ると、祐が書いた詩句であった。そこで、二人は感無量で抱き合って泣いた。後に、祐が出世を果たし、韓夫人と五男二女をもうけた。男の子らは皆一生懸命に勉強し、それぞれ官職についた。女の子らは皆いいところに嫁ぎ、官僚の夫人になった。

【出典】

唐僖宗時，有儒者于祐晚步禁衢。臨視御溝，見浮葉流下。有一葉若隱隱有墨迹，乃取視之，果有詩一聯。祐得之藏於書笥中。祐復爲二句題於紅葉。而流之有贈之以詩曰，君恩不禁東流水，流出宮情是此溝。祐累舉不捷，乃依倚中貴人韓泳爲門館。久之，泳召祐謂曰，帝出宮禁三十人，使各適人。有韓夫人，與吾同姓，今出禁庭，來居吾舍。子未娶，年以踰壯，夫人本良家，才三十，姿色甚麗。吾言之，使聘子，何如。祐避席謝泳。乃令人通媒，及助祐進六禮之數，交二姓之歡。就吉之夕，祐頗契意。既久，韓氏於祐書笥中見紅葉。大驚曰，此吾所作之句，君何故得之。祐具以告韓氏。復曰，吾水中亦得紅葉，不知誰之作也。乃開笥取之。即祐所題之葉。相對驚嘆，感泣久之，曰，事豈偶然哉，莫非前定也。韓氏曰，吾得葉之初，有詩云，獨步天溝岸，臨流得葉時。此情誰會得，腸斷一聯詩。聞者異之。一日，泳開宴謂祐曰，子二人可謝媒人否。韓氏笑曰，吾與祐乃天合也。遂索筆爲詩曰，一聯佳句隨流水，十載幽思滿素懷。今日卻成鸞鳳友，方知紅葉是良媒。泳喜笑曰，吾今知天下事無偶然得者也。僖宗幸蜀，韓泳令祐導前。韓氏以宮中舊物見帝。具言適祐事。帝召祐笑言曰，卿乃朕門下舊客也。祐伏地謝。帝後還。祐以從駕功得官。韓氏生五子二女。皆力學有官。女亦配名家。終身爲令婦。（宋・無名氏撰『分門古今類事』巻十六）

【作例】

「韓夫人」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻四、貞享四年［1687］刊本、文政一年［1818］再刊本）

「韓夫人」（某岡之繪『繪圖の林』巻上、元禄二年［1689］刊本）

かんのぶてい　漢武帝

漢武帝（前141～前87在位）、名前は劉徹といい、景帝の子である。母親は王太后である。孝景四年（前153）、四歳で膠東王となり、孝景七年（前150）、栗太子が廃除され、七歳で皇太子になった。孝景十六年（前141）に、孝景帝が崩御した後、即位して孝武帝となった。

【出典】

孝武皇帝者，孝景中子也。母曰王太后。孝景四年，以皇子爲膠東王。孝景七年，栗太子廢爲臨江王，以膠東王爲太子。孝景十六年崩，太子即位，爲孝武皇帝。孝武皇帝初即位，尤敬鬼神之祀。（漢・司馬遷撰『史記』巻十二孝武本紀第十二）

孝武皇帝，景帝中子也。母曰王美人。年四歳，立爲膠東王。七歳爲皇太子，母爲皇后。十六歳，後三年正月，景帝崩。甲子，太子即皇帝位，尊皇太后竇氏曰太皇太后，皇后曰皇太后。［中略］［後元二年］二月，行幸盩厔五柞宮。乙丑，立皇子弗陵爲皇太子。丁卯，帝崩于五柞宮，入殯于未央宮前殿。三月甲申，葬茂陵。（漢・班超撰『漢書』巻六，武帝紀第六）

【作例】

「漢武帝」（明・天然撰『歴代古人像讃』、弘治一一年［1498］刊本）

「漢武帝像」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「漢武帝」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻四、享保四年［1719］刊本）
「漢武帝」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦嚢』巻二、寛延二年［1749］序、寶暦三年［1743］刊本）
「漢武帝」（馬場信意『分類畫本良材』巻一、正徳五年［1715］刊本）

かんのぶてい、かとうにぎょうこうし、くんしんわごうたいへいをよろこびいんえんなし、きょうたけなわにしてしゅうふうのことばをつくるず　漢武帝、河東に行幸し、君臣和合太平を歓び飲宴なし、興酣にして秋風の辭を作る圖

漢武帝が河東に行幸した際、臣下たちと飲宴をし、大変喜び、「秋風辞」を作ったという。

【出典】
上行幸河東，祠后土。顧視帝京欣然。中流與君臣飲燕。上欣甚。乃自作秋風辭曰，［以下省略］（漢武帝「秋風辭」，『古文眞寶後集』巻一）

【作例】
「漢武帝河東に行幸し君臣和合太平を歓び飲宴なし興酣にして秋風の辭を作る圖」（有臺藤應著、旭輝齋畫『畫本古文眞寶後集』初編巻一、嘉永三年［1850］刊本）

かんぶんこう　韓文公

↓「韓愈」

かんぶんてい　漢文帝

漢の文帝（前180～前157在位）、名前は劉恒といい、高祖の子である。母親は薄姫である。高祖十一年（前196）の春、代王になった。呂后が亡くなった後、帝として迎えられた。文帝が即位してから、戦争をやめ、匈奴に和親の政策をとり、減税の措置を取り、民衆を休養させ、生産を向上させるなど一連の政策を実施した。文帝後七年（前157）に崩御した。在位して二十三年。諡は孝文皇帝という。廟の号は太宗で、覇陵に埋葬された。

【出典】
孝文皇帝，高祖中子也。高祖十一年春，已破陳豨軍，定代地，立爲代王，都中都。太后薄氏子。即位十七年，高后八年七月，高后崩。九月，諸呂呂産等欲爲亂，以危劉氏，大臣共誅之，謀召立代王，事在呂后諸語中。［中略］代王西鄉讓者三，南鄉讓者再。丞相平等皆曰，臣伏計之，大王奉高帝宗廟最宜稱，雖天下諸侯萬民以爲宜。臣等爲宗廟社稷計，不敢忽。願大王幸聽臣等。臣謹奉天子璽符再拜上。代王曰，宗室將相王列侯以爲莫宜寡人，寡人不敢辭。遂即天子位。（漢・司馬遷撰『史記』巻十，孝文本紀第十）

【作例】
「漢文帝」（明・天然撰『歴代古人像讃』、弘治一一年［1498］刊本）
「漢文帝像」（明・王圻、王思義『三才圖會』人物二巻、萬暦三七年［1609］刊本）
「孝文帝」（馬場信意『分類畫本良材』巻二、正徳五年［1715］刊本）
「漢文帝」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年［1803］刊本）
「漢文帝」（南里亭其樂輯、葛飾戴斗畫『二十四孝圖會』、文政五年［1822］河内屋等發兌）
「漢文帝」（悟足齋固碩書『二十四孝繪抄』、天保一三年［1842］、須原屋等發行）

かんぶんていとせいおうぼ　漢文帝と西王母

「漢文帝と西王母」は「漢武帝と西王母」の誤りである。

【出典】

孝武皇帝，景帝之子也。［中略］及即位，好長生之術，常祭名山大澤，以求神仙。［中略］因呼帝共坐，帝南面，向王母。母自設膳，膳精非常。豊珍之肴，芳華百果，紫芝萎蕤，紛若塡樏。清香之酒，非地上所有，香氣殊絶，帝不能名也。又命侍女索桃，須臾，以盤盛桃七枚，大如鴨子，形圓色青，以呈王母。母以四枚與帝，自食三桃。桃之甘美，口有盈味。帝食輒彖核。母曰，何謂。帝曰，欲種之耳。母曰，此桃三千歳，一生實耳，中夏地薄，種之不生如何。帝乃止。於坐上酒觴數過，王母乃命侍女王子登彈八瑯之璈，又命侍女董雙成吹雲龢之笙，又命侍女石公子擊崑庭之鐘，又命侍女許飛瓊鼓震靈之簧，侍女阮凌華拊五靈之石，侍女范成君擊洞庭之磬，侍女段安香作九天之鈞。於是，衆聲澈朗，靈音駭空。（無名氏撰『漢武帝內傳』）

【作例】

「漢文帝と西王母」（滝澤清畫『潛龍畫譜』人物之部、明治一五年［1882］刊本）

かんふんふん　関盼盼

関盼盼は徐州（江蘇省徐州）の舞妓で、歌や踊りが得意である。後に張建封が盼盼を娶った。張が亡くなった後、関盼盼も再婚せず、燕子楼に閉じ込めて十余年となる。白楽天が盼盼に詩を贈り、盼盼がその詩を読んで、余計に悲しくなり、遂に食事が喉を通らなくなって、世を去ってしまった。

【出典】

關盼盼，徐州妓也。張建封納之。張歿，獨居彭城故燕子樓，歷十餘年。白居易贈詩諷其死，盼盼得詩泣曰，妾非不能死，恐我公有從死之妾，玷清範耳。乃和白詩。旬日不食而卒。詩四首。（清・彭定求等撰『全唐詩』巻八百二）

【作例】

「関盼盼」（清王翬繪『百美新詠』圖傳八十四、嘉慶年間［1796～1820］刊本）

「盼盼」（葉九如編『三希堂畫譜』仕女畫譜大観、中国古畫譜集成第十八巻、山東美術出版社、2000年）

かんほうおしどりになる　韓朋爲鴛鴦

→「韓朋妻」

【作例】

「韓朋爲鴛鴦」（橘宗重著、長谷川等雲繪『増補繪本寶鑑』巻二、享保年間［1716～1736］刊本）

→「韓朋妻」

かんほうのつま　韓朋妻

韓朋は韓憑のことである。韓憑は宋の康王の舎人である。韓憑の妻何氏が美貌のため、康王に奪われた。韓憑がそのことで康王を怨んだ。すると、康王が韓憑を牢獄に入れた。韓憑の妻はひそかに手紙を送り、「其雨淫淫，河大水深，日出當心。」と書いた。康王はその手紙を入手し、周りの近臣に見せたが、だれもその意味が解けなかった。大臣蘇賀だけがその意味を理解でき、「『其雨淫淫』とは悩みと恋しいという意味であり、『河大水深』とは行き来できないという意味であり、『日出當心』とは死ぬ覚悟をしているという意味である。」と説明した。しばらくすると、韓憑は自殺した。彼の妻はひそかに服を腐らせて、康王と一緒に高い台に登った時に、飛び降りて自殺した。周りの人た

ちが彼女を止めようとしたが、服が腐ったため、切れた。遂に止められなかった。遺書に「王様には私が生きた方がいいかもしれないが、私には死んだ方がいい。死後、私を韓憑と一緒に埋葬してほしい。」とある。康王は大変立腹し、何氏を韓憑の墓の近くに埋葬して、「あなたたちが愛し合っていたら、墓を一つにしてみなさい。私は止めないからだ。」と言った。すると、一晩で大きな梓の木が一本ずつ二つの墓に生えてきた。数日で大きくなり、二本の木は枝が絡み合い、根っこがつながるようになった。木の上に鴛鴦がとまっていて、首が絡み合って鳴いていた。宋の人々が二人を不憫に思い、その木を「相思樹」と呼んでいた。「相思」という言葉はここから来たのである。

【出典】

宋康王舍人韓憑，娶妻何氏，美，康王奪之。憑怨，王囚之，論爲城旦。妻密遺憑書，繆其辭曰，其雨淫淫，河大水深，日出當心。既而王得其書，以示左右，左右莫解其意。臣蘇賀對曰，其雨淫淫，言愁且思也。河大水深，不得往來也。日出當心，心有死志也。俄而憑乃自殺。其妻乃陰腐其衣。王與之登臺，妻遂自投臺，左右攬之，衣不中手而死。遺書於帶曰，王利其生，妾利其死。願以屍骨，賜憑合葬。王怒，弗聽。使里人埋之，冢相望也。王曰，爾夫婦相愛不已，若能使冢合，則吾弗阻也。宿昔之間，便有大梓木生於二冢之端，旬日而大盈抱，屈體相就，根交於下，枝錯於上。又有鴛鴦，雌雄各一，桓棲樹上，晨夕不去，交頸悲鳴，音聲感人。宋人哀之，遂號其木曰，相思樹。相思之名，起於此也。南人謂此禽即韓憑夫婦之精魂。今睢陽有韓憑城，其歌謠至今猶存。（晉・干寶撰『搜神記』巻十一）

【作例】

「韓朋妻」（馬場信意『分類畫本良材』巻四、正徳五年［1715］刊本）

↓「韓朋爲鴛鴦」

かんぼくふぎ　干木富義

段干木が官を辞して家に帰った。魏文候が彼の町を通り過ぎた際、段干木を殺害した。その下僕は「段干木は平民なのに、なぜ彼を殺害したでしょうか」と聞いた。魏文候は「段干木が義を、私が財を持っている。」と答えた。

【出典】

淮南子曰，段干木辭祿而處家。魏文候過其閭而軾之。其僕曰，干木布衣之士。君軾其閭，不已甚乎。文侯曰，干木不趨勢利，懷君子之道，隱處窮巷，聲施千里。寡人敢勿軾乎。干木光於德，寡人光於勢。干木富於義，寡人富於財。勢不若德尊。財不若義高。干木雖以己易寡人弗爲。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「干木富義」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編巻八、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんゆ　韓愈

韓愈（768～824）、字は退之といい、昌黎（河南省南陽）の人である。愈は三歳の頃、孤児になり、伯父に預かって扶養することになった。子供の頃から一生懸命に勉強した。六経と百家の説に精通する。進士になるために、韓愈は自分の詩文を貴族や大臣に送った。前宰相の鄭餘慶が愈の詩文を高く評価し、熱心に彼を推薦した。それで名声を上げた。そのうち進士になった。御史、刑部侍郎、祭酒、吏部侍郎などを歴任した。唐の穆宗の長慶四年に亡くなった。年は五十七歳であった。禮部尚書を贈られ、謚は「文公」という。学者たちは彼を「昌黎先生」と称した。

【出典】

韓愈，字退之，昌黎人。父仲卿，無名位。愈生三歲而孤養於從父兄，愈自以孤子，幼刻苦學儒，不俟奬勵。大曆、貞元之間，文字多尚古學，效楊雄、董仲舒之述作而獨孤，及梁肅最稱淵奥，儒林推重。愈從其徒遊，銳意鑽仰，欲自振於一代。洎舉進士，投文於公卿間。故相鄭餘慶頗爲之延譽，由是知名於時。尋登進士第，宰相董晉出鎮大梁，辟爲巡官府，除徐州。張建封又請爲其賓佐。愈發言眞率，無所畏避。操行堅正，拙於世務。調授四門博士，轉監察御史。德宗晚年，政出多門，宰相不專機務，宮市之弊，諫官論之不聽。愈嘗上章數千言極論之，不聽，怒貶爲連州 山陽令，量移江陵府掾曹。元和初召爲國子博士，遷都官員外郎。［中略］初，愈至潮陽，既視事，詢吏民疾苦，皆曰，郡西湫水有鱷魚，卵而化，長數丈，食民畜産將盡，以是民貧。居數日，愈往視之，令判官秦濟炮一豚一羊，投之湫水。［中略］呪之夕，有暴風雷起於湫中。數日，湫水盡涸，徙於舊湫西六十里。自是潮人無鱷患。［中略］長慶四年十二月卒，時年五十七，贈禮部尚書，謚曰文。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』巻一百六十，列傳第一百一十）

韓愈，字退之，鄧州 南陽人。七世祖茂，有功於後魏，封安定王。父仲卿，爲武昌令，有美政，既去，縣人刻石頌德。終祕書郎。愈生三歲而孤，隨伯兄會貶官嶺表。會卒，嫂鄭鞠之。愈自知讀書，日記數千百言，比長，盡能通六經、百家學。擢進士第。［中略］愈性明銳，不詭隨。與人交，始終不少變。成就後進士，往往知名。經愈指授，皆稱韓門子弟。愈官顯，稍謝遣。（宋・歐陽修、宋祁撰『新唐書』巻一百七十六，列傳第一百一）

【作例】

「韓文公」（明・天然撰『歷代古人像讃』、弘治一一年［1498］刊本）

「韓退之像」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物六巻、萬曆三七年［1609］刊本）

「韓文公」（清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年［1743］刊本）

「韓愈表諫佛骨」（『孔門儒教列傳』巻一、明刊本）

「韓愈」（狩野探幽繪『詩仙堂志』詩仙圖六、萬治二年［1659］序刊本）

「韓文公」（法眼春卜一翁纂『和漢雙玉丹青錦囊』巻四、寶曆三年［1753］刊本）

かんよう　甘蠅

昔の甘蠅という人は射ることが得意であった。蠅の弟子は飛衛という。

【出典】

古之善射者甘蠅。蠅之弟子曰飛衛。（晉・張華撰『博物志』巻六）

【作例】

「甘蠅」（橘有税『繪本故事談』巻一、正徳四年［1714］刊本）

かんようきゅう　咸陽宮

秦の孝公の頃、商鞅が変法を実施した後、咸陽で宮殿を作り、都を雍より咸陽に移した。その宮殿は咸陽宮という。秦の始皇帝の頃、さらに拡張工事を行い、膨大な宮殿群となった。

【出典】

居三年，作爲築冀闕宮庭於咸陽。秦自雍徙都之。（漢・司馬遷撰『史記』巻六十八、商君列傳第八）

咸陽故城在今咸陽東二十里。自秦孝公至始皇帝、胡亥竝都此城。案孝公十二年作咸陽，築冀闕，徙都之。始皇二十六年，徙天下高貲富豪於咸陽十二萬戸。諸廟及臺苑皆在渭南。秦每破諸侯，徹其宮室，作之咸陽 北坂上。南臨渭，自雍門以東，至涇渭，殿屋複道，周閣相屬。

所得諸侯美人、鐘鼓以充之。二十七年，作信宮渭南。已而更命信宮爲極廟，象天極。自極廟道通驪山，作甘泉前殿。築甬道，自咸陽屬之。始皇窮極奢侈，築咸陽宮。因北陵營殿，端門四達，以則紫宮，象帝居。引渭水貫都，以象天漢。横橋南渡，以法牽牛。（無名氏撰『三輔黄圖』巻一）

【作例】

「咸陽宮圖」［雲谷等與筆］（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』三巻、寛延二年［1749］序刊本）

がんれいもかい　元禮模楷

後漢の李膺（110～169）、字は元禮といい、潁川の襄城（河南省）の人である。彼の祖父は漢安帝（106～125在位）頃の太尉で、父親は趙国の相である。膺は孤高で、人との親交はない。孝廉として推挙され、河南尹（河南省）に任官された。太学の中で名声が高く、「天下模楷李元禮」（天下の手本李元禮）と呼ばれていた。（南朝宋・范曄撰『後漢書』巻六七）

【出典】

後漢李膺字元禮，潁川襄城人。性簡亢，無所交接，舉孝廉高第。遷河南尹。及黨議起，流言轉入太學，諸生三萬餘人，郭林宗、賈偉節為冠，並與膺、陳藩、王暢更相褒重。學中語曰，天下模楷李元禮，不畏彊禦陳仲舉，天下俊秀王叔茂。（唐・李瀚撰『蒙求集注』巻上）

【作例】

「元禮模楷」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編巻七、享和元年［1801］序刊本、河内屋等發行）

かんろ　韓盧

韓盧は齊の国の名犬で、一日五百里を走れる。

【出典】

（宋玉曰）昔者齊有良兔。曰，東郭巍蓋一旦而走五百里。於是齊有良狗。曰，韓盧。亦一旦而走五百里。使之遙見而指屬。則雖韓盧不及衆兔之塵。若躡跡而縱緤。則雖東郭巍亦不能離。今子之屬。（漢・劉向撰『新序』巻五，雜事第五）

かんろく　管輅

管輅（208～225）、字は公明といい、平原（山東省平原）の人である。容姿が醜く、貫禄がない。冗談を言うのは相手を見ない。故に人に好かれてはいるが、尊敬されない。少府丞を務めたが、翌年二月に亡くなった。四十八歲であった。

【出典】

管輅，字公明，平原人也。容貌粗醜，無威儀。而嗜酒，飲食言戲，不擇非類，故人多愛之而不敬也。［略］是歲八月，爲少府丞，明年二月卒，年四十八。（晉・陳壽撰『三國志』巻二十九，魏書・方伎傳第二十九）

【作例】

「管輅」（百二十回本『繪圖三国演義』、上海図書集成局、光緒一六年［1890］刊本）

がんとう　雁宕（雁蕩）

雁蕩山は楽清県（浙江省楽清）から東へ九十里のところにある。南に芙蓉峰がある。また、竜湫、初月谷などの名所がある。

【出典】

鴈蕩山在樂清縣東九十里，此山天下奇委，南有芙蓉峯，下有芙蓉驛，前瞰大海，然未知鴈蕩龍湫所在。後因伐木，始見此山頂有大池。相傳以爲鴈蕩下有水一潭，諸峯皆峭峻險怪，上聳千尺穹崖巨谷，不類

他山，皆包在諸谷中，自嶺外望之，都無所見之。谷中則森然。千霄原其理當是爲谷中大水衝激，沙土盡去，惟石巋然挺立耳。如大小龍湫水簾、初月谷之類皆是水鑿之穴，自下望之，則高崖峭壁。從上觀之，適與地平，以至諸峯之頂亦抵於山頂之地，而世間溝壑之處，皆有植土，龕巖亦此類，而今成皐陜，西大澗中之上，洞及百尺，迥然聳立，亦爲蕩具體而微者。但此石彼土，而既非梃出。地上則爲深谷，林莽蔽隔，古人未見靈運所不至，理不足怪也。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理九巻）

【作例】

「雁宕（雁蕩）圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理九巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「南雁蕩圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理九巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「雁宕（雁蕩）」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻二、享保四年［1719］刊本）

がんふじんどうにきゅうざん　顔夫人禱尼丘山

紇は顔氏の女と不倫（野合）し、顔氏は尼丘という山で祈祷し孔子を生んだという。

【出典】

紇與顔氏女野合而生孔子。禱於尼丘得孔子。（漢・司馬遷撰『史記』巻四十七、孔子世家第十七）

【作例】

「禱嗣尼丘」（明・呉家謨集校『孔聖家語圖』一巻、万暦一七年［1589］刻本）

「顔夫人禱尼丘山」（橘有税［橘氏宗兵衛］『繪本寫寶袋』巻五、享保五年［1720］刊本）

がんらいこう　雁来紅（老少年）

雁来紅は一種の植物であり、「秋紅」や「老少年」ともいう。

【出典】

老少年一名秋紅，一名雁來紅。有作詩曰，翔雁南來塞草秋，未霜紅葉已先愁。綠珠宴罷歸金谷，七尺珊瑚夜不收。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』十二巻）

【作例】

「老少年」［雁来紅］（明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二巻、萬暦三七年［1609］刊本）

「雁来紅」（渓斎義信筆『渓斎浮世畫譜』二編）